

これまでの経過概要

国際協力と分担を基本理念とする南極観測をはじめ、両極域で得られた学術データ情報の提供、とりわけデータベースの構築・公開などの基盤整備が関係各国に求められている。こうした状況で、50年にわたり極地で蓄積された地上観測、観測衛星や船上観測等によるデータを効率的、安定的に保存管理し、国内外の研究者がネットワーク経由で容易に利用できるように、文字情報・数値データの所在情報（メタデータ）を「極域科学データライブラリシステム（POLARIS）」で公開してきた。

学術メタデータには、南極域のモニタリング観測データをはじめ、プロジェクト研究や北極域のデータを新たに追加集積した。定常官庁を含めたデータ数は、本原稿執筆現在で、計114件（日本語版（旧版URL）；<http://polaris.nipr.ac.jp/~dbase/>）、125件（英語版（旧版URL）；<http://polaris.nipr.ac.jp/~dbase/e/>）である。

国際対応としては、南極データマネジメント委員会（Standing Committee on Antarctic Data Management；SCADM）の要請に応じて、国内の極域関連データの主要な提供元（National Antarctic Data Center；NADC）として機能する。具体的には、所内データベースと同一の観測データに関するメタデータを、NASA/GCMDの南極マスターディレクトリー（Antarctic Master Directory；AMD）内に登録を行っている（計210件、NIPR経由の定常官庁データを含む）。さらに、国際極年2007-2008（International Polar Year；IPY）に関係するメタデータ集積も、別途進行中である（計142件）。

極域関連の学術データ公開の流れ



図 極域関連の学術データ公開の流れ